

書評

名古屋外国語大学編

『世界教養72のレシビ』

名古屋外国語大学出版会、二〇一八年

近藤 野里



本書は本学の世界教養プログラムで行われている授業のダイジェスト版である。「72のレシビ」のタイトル通り、72の授業内容がこの本に凝縮されている。

さて本書は学生に対する授業の宣伝広告でもあるだろう。世界教養プログラムの中から複数の授業を履修するため、数ある中から「これぞ」という授業を選ぶとなるとなかなか大変である。従来であれば、授業のシラバス検索を利用するという手段や、すでに授業を取った人々から漏れ伝わった噂も授業選びの指標になっていたのではないかと思う。はたまた、憧れの××さんとか〇〇くんがこの授業を取りたいと言っていたと聞いて淡い期待からとか、△△先生の授業は面白そうだから受講しようとか、選択する動機もやはり様々だったと思われる。動機は何であれ、授業の選択は、様々な「知」との出会いのきっかけになるのも確かだろう。それはさておき、数ある授業の中からどれを受講しようか悩んだ時に、この本は大変便利である。例えば、この先生はこんなことを考えながら授業を作っている・教えているのだなと考えたり、この先生とはまだ知り合いではないが、なんとなく気が合いそうだなと気づかされたり、この一言が気になったなど、授業選択の動機付けができるからである。まずは自分の心に「ささる」言葉を探してみるのがよいのではないだろうか。さて、私の心に「ささった」言葉もやはり複数あるの

で、いくつか紹介したい。

「ユニバーサルデザインと大和心」（ユニバーサルデザイン）では、「日本はユニバーサルデザイン先進国」というのが世界の評価だ。」という件をきっかけに、改めて日本の言語景觀に目が行くようになった。普段何気なく歩いている道や、毎日乗る電車の中で、実は多言語表示を目にしている。ある程度大きな町に住んでいる日本人にとって、もはや物珍しいものではなく、意識して初めて気づくほどに自然なものになっている可能性も高い。外国から来た人々が安心して生活したり、観光したりできるような仕組みは既に存在する。そして、このような仕組みがさらに改善されていく必要がある。本学の学生がそのような仕組みを改善していける人材に育つことを期待したい。

「異文化に対する力」（異文化接触）の中では、「……会社に勤めようが家庭に入ろうが、『異文化』に接する機会が多い。理不尽に思えるかもしれない社会のルールも、見知らぬ土地の慣習にも、とまどうばかりであるかもしれないが、『異文化』に対する免疫があれば、そこでポキッと折れてしまうことはない」という言葉に共感を覚えた。外国に暮らさなくとも、身近な他者というのは、程度はあれ異文化である。異なるものを冷静に分析し、時には上手く折り合いをつけて生きていけるのであれば、違いというものを楽しめる余裕を手に入れることができるのだろう。

「これからの世界経済を読むために」（グローバルビジネスと外交）では、「花火には、火薬が必要だ。いつどこから日本に来たのか。同じようにトマトやジャガイモはいつどこから日本に来たのだろうか」という文章が印象的だった。歴史的に、ヒトが移動すれば、モノも移動する。たとえ異国に出ていくことがなくても、異国のモノに出会うことは実は人間の歴史の常だったわけである。このような切り口からビジネスや外交について考える機会を持つのは、実はとても「外大」らしいことなのかもしれない。

本学で世界教養プログラムの責任者をされていた今は亡き西川真子先生が、本を読む中で見つけた印象深い「言葉」を切り取って、図書館で配布する「しおり」のために選んでいらつしやったことを思い出す。自分のしおりに入れる「言葉」を選ぶような感覚で、授業を選ぶ際に本書を読むのはどうだろうか。